巻頭対談

決してあきらめない!! 覚悟と勇気が生んだ自然界の道しるべ

リンゴの木が教えてくれた大自然の法則

私のリンゴの木は誰もができなかったことを可能にしてくれました。
私も厳しかった、苦しかったけれども、
リンゴの木はもっと苦しかったんだと思うんです。
頑張ってくれたリンゴに、恩返しをしていきたいと思っています。

リンゴ農家
木村秋則
武道家・UK実践塾
宇城憲治

農薬なしでは絶対に不可能とされてきたリンゴ栽培を、無農薬・無肥料の自然栽培で見事成功させ、未知なる世界を切り開いた木村秋則氏。

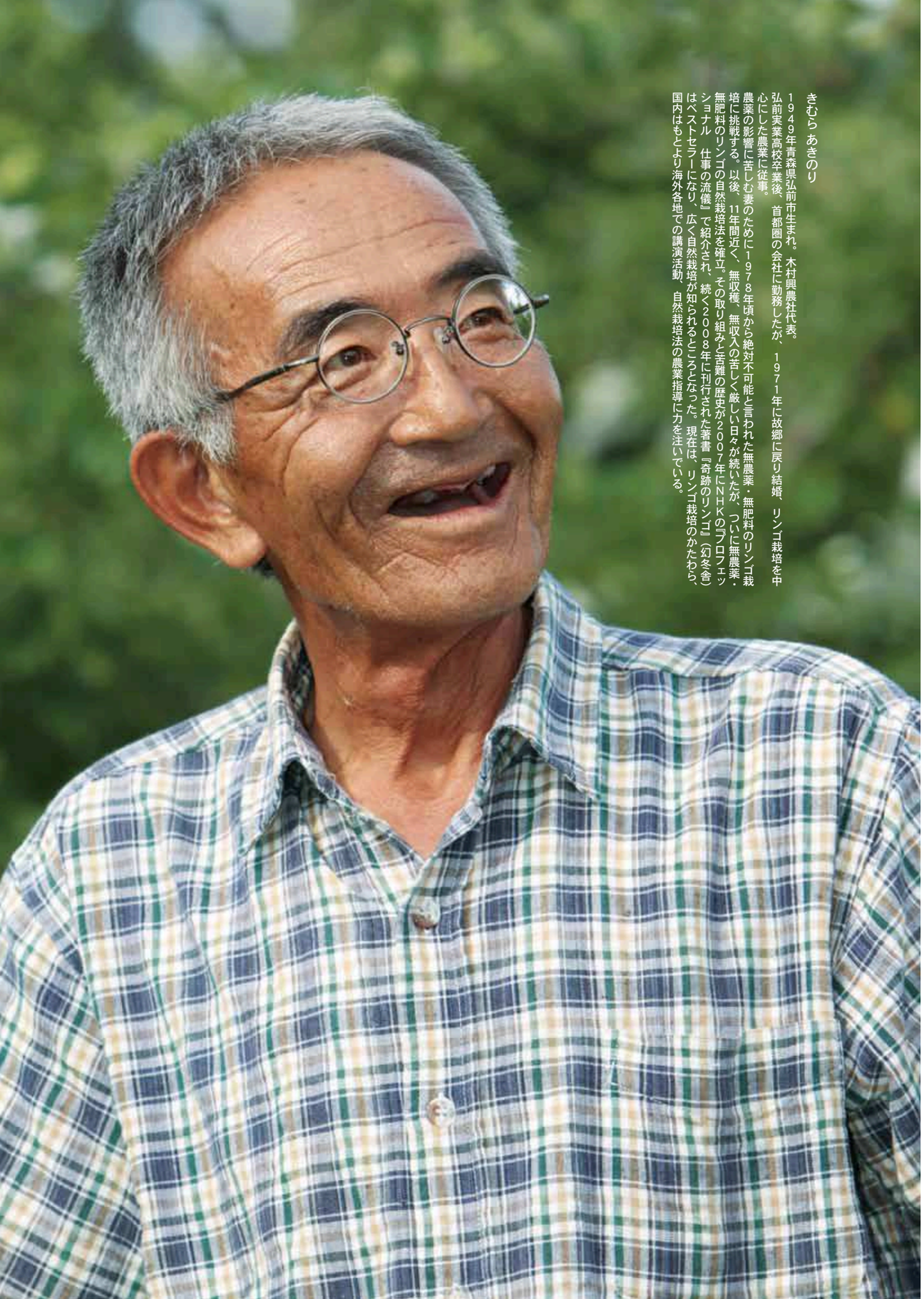
29歳で思い立ったその挑戦はしかし、11年間という失敗の連続と、自殺にまで追い込まれるほどの苦しみを氏に与えるものだった。その想像を絶する苦難の道のりは、今夏封切られた映画『奇跡のリンゴ』や氏の著書に詳しい。

なぜ木村氏はあきらめずに志を貫き通すことができたのか。その覚悟はどこから生まれたのか——。

リンゴの木を通して木村氏が気づかされた目に見えない大自然の法則はまさに、世界の財産だ。本対談では、そんな木村氏のエネルギーに、「気」による人間の潜在能力の発掘への道を切り開く宇城氏が迫った。まさに情熱の対談となった。

2013年8月7日　青森県弘前
木村興農社にて

リンゴ園で収穫する木村秋則さん（2012年11月撮影／写真提供『農業ルネッサンス』）



きむら あきのり
1949年青森県弘前市生まれ。木村興農社代表。弘前実業高校卒業後、首都圏の会社に勤務したが、1971年に故郷に戻り結婚、リンゴ栽培を中心にした農業に従事。
農薬の影響に苦しむ妻のために1978年頃から絶対不可能と言われた無農薬・無肥料のリンゴ栽培に挑戦する。以後、11年間近く、無収穫、無収入の苦しく厳しい日々が続いたが、ついに無農薬・無肥料のリンゴの自然栽培法を確立。その取り組みと苦難の歴史が2007年にNHKの『プロフェッショナル　仕事の流儀』で紹介され、続く2008年に刊行された著書『奇跡のリンゴ』（幻冬舎）はベストセラーになり、広く自然栽培が知られるところとなった。現在は、リンゴ栽培のかたわら、国内はもとより海外各地での講演活動、自然栽培法の農業指導に力を注いでいる。

Part 1
すべてのものに心がある

道はいくらでもあるけど、自分が欲に走ったら、細い道を行く。
みんなのために走ったら、広い道になると思うんです。
そんな大勢の人が歩く道を残していきたい。（木村）

自然栽培は先急ぎしてはなりません

宇城　木村さんにお会いするのを楽しみに来ました。映画『奇跡のリンゴ』は初日に見に行きましたが、たいへん感動しました。観客は女性がたいへん多かったですね（笑）。

木村　3分の1はドラマです（笑）。この栽培をやってからのことはほとんど真実ですが。実は自分ではまともに見たことがないんです。結婚式のシーンは自分が出ているので見ましたが、あとはよからぬ予感がして見ていない（笑）。
　あの映画にあった言葉、「ばっかでねぇか！」は、いま青森県ではやっているんですよ（笑）。

宇城　今年の流行語大賞になるんじゃないですか（笑）。しかし愛情ある言葉ですよね。それにしてもこれまでの農薬に頼るリンゴ栽培から、自然栽培にかえてやるには、何よりも土や木が元に戻るまでしばらく待たないとならないのでしょうね。

木村　はい。土づくりには最低でも3年はかかります。それと幹のなかに農薬がだいぶ入ってしまっているので、それが抜けるまでの時間が必要です。それでも半分くらいは枯れてしまいますね。だから私は自然栽培に挑戦する人に「全部の畑でやるな」と言っています。10の畑があったら、その10分の1の面積でやりなさい、と。そして、どんな姿になるかを見てみてくださいと言っています。ただ「リンゴが実らない」だけではないんです。葉っぱは落ちてなくなる、虫がつく。無残な姿になります。
　『奇跡のリンゴ』の映画をつくる時も監督はそういう放置された畑を見た上でつくったんですね。やっぱり無残な姿というのは、実際に見ないとわからないものです。

宇城　現実を直視して覚悟を知るということですね。成功したリンゴ園は見ても、その苦労は本や話でしか知ることができないわけですからね。しかも自然のサイクルは最低でも1年という時間をもっている。

木村　ところが人間というのは、早く答を出したいんですね。ですから「先急ぎをするな」と。「自然のサイクルは長いし、農家のお金が入ってくるのは、年1回なのだから、それに合わせたサイクルで動きなさい」と言っています。だから階段を一段一段上がるような気持ちで実施してもらいたいと言っています。

宇城　大自然の要点がわかっていらっしゃるからこその素晴らしいアドバイスですね。

心が先で身体はあとからついてくる

木村　私は一度、インフルエンザが重症化してあの世に行きかけたことがあるのです。寝ていたらシャボン玉みたいなのが降りてきて、私を包むんですよ。すると、ふわ、ふあと上がっていく。そして3メートルくらいのところで止まるんです。なぜわかるかと言うと、あとでその高さを自分で測ったからですね（笑）。
　そして、そこから下に横たわっている自分を見るのですが、それが自分なのに誰だかわからない。そしてそのままゆっくりゆっくり上がっていく。私自身はパンツ一枚で寝ているのですが、シャボン玉にいる私はなぜかシャツとズボンとズックをはいていて、しかも歯まである（笑）。そこで初めて「ああ、私は死んだんだ」とわかったんです。
　そして突然ただ一人ぽつんと真っ暗闇のところに立っていた。糸で引っ張られるわけでもないのに、方向がわからないまま歩き始めるんです。そしてその途中で、ふと「先に死んだじいちゃんはどうしているかな」と思った。すると、その思った瞬間に、目の前に祖父が現われたんです。
　だから、もし、あの世に行かれる時に覚えておられたら、ぜひやってみてください。「思った」だけで現われるんです（笑）。でも、その時に祖父に言われたことは、「おまえ、誰だ？」でした（笑）。

極めようとした人間は、どこに行っても何をしても、「変わろう」という気迫がありますね。（宇城）

だから、あの世に行きかけてわかったこと。それは、「あの世に行くと、みんな他人だ」ということです（笑）。

宇城　そうなんですか（笑）。不思議な体験ですね。以前テレビで見たアメリカでの実話ですが、脳死と診断された若い男性が、あと1時間後に臓器提供のための摘出手術をすることになっていた。お兄さんという人が弟の脳死をどうしてもあきらめきれずに、最後にと思って小さい頃に遊んでいたナイフで弟の足の裏を切るふりをしたんです。そうしたら、その動かないはずの足をぱっと引っ込めたそうです。すぐその事実を医者に知らせ、移植摘出は即取りやめとなり、その方は現在元気でご活躍しているのですが、その時の一部始終を全部覚えていると言っていましたね。

木村　そうなんですか。おんなじですね。私の場合は、その後地鳴りがしてきて、私のことを呼んでいるのかなと思った瞬間、またそのシャボン玉が私を包み、今度はものすごいスピードで降りていくんです。上がる時と全然違うのです。そしてなぜかまた3メートルの地点で止まった。どうやってそこから自分の体に戻ると思いますか？　同じポーズを真上でとって、そのまますっと体に入っていくんです。

これ私、自分で経験しましたからね。だから、「心が先で身体はあとからついてくる」と思うのはそこなんですよ。このことは誰も信じないし、もしかしたら夢を見たのかもわかりませんが、そういうことを自分で味わったことは確かなんです。

宇城　幕末の剣術の身体の使い方に、「身体は内なる気に応じて動き、気は心の向かうところに応ずる」という教えがあります。つまり身体を動かすのは、内なる「気」であり、さらに、その「気」は、「心」に応ずる。心が第一という時系列になっているのですが、現在は頭の命令で身体、筋肉を動かすという部分体運動になっていて、心が介在していないんですね。

ゼロからのスタートはやってきた人より成長が速い

木村　今は科学的なデータに基づいてトレーニングしたりしていますよね。昔『ロッキー』という映画があって、相手のボクサーは、すごい科学的トレーニングをやり、主人公のロッキーは薪割りをしたりして原始的なトレーニングをしたというのがありましたが、やはり、西洋と和の文化を合わせて初めて本当の人間らしい文化ができるのではないかなという気がするんですよ。

宇城　その通りで、本来、人間先にありきですよね。サラリーマンの場合、ふつう仕事をして失敗しても、給料が多少下がる程度でおさまりますが、木村さんのやっておられる自然栽培の場合、失敗したらリンゴが枯れてしまうわけではないですか。しかも次の結果を知るにしても、農業では最低でも1年はかかる。自然栽培だと4、5年はかかる。自然栽培がいかに素晴らしく理にかなった方法であるかを知って、それを実践しようとしたとしても、そのうち生活ができなくなり音を上げていく人も出る……。

何かを新しくやろうとした時、それまでの「癖」をとるのに時間がかかるんですね。空手において言えば、5年やってきたら、その癖をとるのに5年はかかる。従って忘れる努力と学ぶ努力を二つ同時にやっていかなくてはならない。ですから何もやってこなかった人のほうが、やってきた人よりも上達が速い場合が多い。ゼロからスタートするからですね。自然栽培を目指す人もそれと同じようなことなんでしょうね。

木村　そうそう、同じです。脱サラしてやる人のほうが成功していくのです。それは無知ゆえに、言われることをどんどん素直に吸収するからです。しかし今までなにかしら農業をやってきた人は、私の言うことをなかなか飲み込むことができません。

宇城　同じですね。スポーツをやっていて、強さを求めてきた人間ほど変わりにくいんですね。ところが不思議なことに、チャンピオンにまで上りつめた人間のなかには、自分より強い世界があることを知って、逆にぱっと切り替えられる人もいる。極めようとした人間は、どこに行っても何をしても、「変わろう」という気迫がありますね。

しかしそういう人はごくまれで、「チャンピオンであることが全てに通じるのだ」と考える狭い世界から抜けられない人が

多いのもまた不思議ですね、プロセスの在り方の違いだと思うのですが。

木村　私ほど失敗した男は、この世にいないんじゃないの、と言われるくらい私は失敗してきました（笑）。でも、失敗した分、「こうすると失敗する」という答を得たわけです。エジソンでも数多くの発明の裏には数え切れないほどの失敗がある。それと同じだと思うのです。だから、すべてを与えられて坊ちゃんのように育てられていくのと、雑草のごとく育てられていくのとでは、どっちが強いかというと、やっぱり雑草ですよね。

仕事は常に真剣勝負その先にあるのは社会貢献

宇城　その通りだと思います。心が折れにくいところがありますね。江戸時代の武道修業のプロセスをうたった歌に、七忍（ななしのぶ）という教えがあります。すなわち、「忍び忍びしや、誰でも忍ぶ、忍ばらん忍び、忍びしど忍ぶ」。「大変だな」という程度では、「忍ぶ」には入らない。限界を超えるような忍びに耐えて初めて「忍ぶ」ということなのだという教えなんですね。

木村　私もそう思う。「困った困った」と言っている人は、本当に困っていない（笑）。本当に困れば、口に出てこないの。

宇城　もうひとつ幕末の剣豪の言葉に、「心の発動が技となり形となる」というのがあります。まさに木村さんの「心の発動」が、「農業の技」となって人格、キャラクターという形となっている、このことなんですね。心の発動というのはすべてにおいてスピードが速い。

幕末に、親のかたきをとりたいと剣の達人に相談にきた人がいた。強い相手に100パーセント勝ち目のないところでの勝ちを収める方法として、「相抜け」というものを伝授するんですね。それは、「来たら、刺せ」というだけの事なんですが、その「刺せ」のスピード感として、月夜の晩にふすまを開ける、するとそこに光が差し込む、そのタイミングなのだと、すなわち光の速さなんですね。ですから江戸時代から戦国時代の勝負は、光の速さでものを考えていたのですね。またそれが理にかなっている。それを今いくら同じことを科学的にやろうとしても駄目

うしろ　けんじ
1949年宮崎県生まれ。エレクトロニクス分野の技術者、経営者として活躍する一方で武道修行を積み、文武両道の生き様と、武術の究極「気」による指導で、人々に潜在能力を気づかせる活動を展開中。「気」による不可能が可能となる体験は、多くの人に希望と勇気を与え、人間本来の自信と謙虚さを取り戻すきっかけとなっている。空手塾、道塾、親子塾、野球塾、企業・学校講演などで「気づく・気づかせる」指導を展開中。
㈱UK実践塾 代表取締役
心道流空手道 範士八段　全剣連居合道 教士七段　宇城塾総本部道場 創心館館長
http://www.uk-ji.com/

彫刻家 和久奈 南都留　ワグナー・ナンドール「哲学の庭」

私は長年研究していた
分析的美術史の研究から
幸せへの道を見出しました。
その理論を彫刻の形で表現したのが
この「哲学の庭」です。
この道は人類共通の進歩を示し、
考える道を開いています。
問題がたやすく解決されるとは思いません。
しかし私はこの方向に向かって
進むべきだと確信するのです。

ワグナー・ナンドール

「哲学の庭」 ワグナー・ナンドール アートギャラリー
世界の大きな宗教・思想の祖となった人物――アブラハム、エクナトン、キリスト、釈迦、老子を中心に、ガンジー、聖フランシス、達磨大師（到達した哲学・思想の境地を社会に広め実践した人物）、聖徳太子、ハムラビ、ユスティニアヌス（現在も伝わる著名な法を整備した人物）といった偉人が、時代や文化、社会基盤の違いを超えて一堂に会している。この益子町のアートギャラリーのほか、東京中野区哲学堂公園と、ハンガリー・ブダペストにも設置されている。

Photo by　乾 剛

「静けさの文化こそ日本人の聡明さを生み出してきた。その慎ましやかさで、聡明に渡り合えばいい。日本人を通せばいいのだ。」

第二次世界大戦、ハンガリー動乱、命からがらの亡命――。様々な苦難を経てようやく辿りついた地が、幼い頃から祖父や父母にその武士道精神や倫理観の素晴らしさを伝え聞かされていた日本であった。ちよさんと再婚し、日本に帰化して75歳で亡くなるまで、世界平和と人々の幸せを願って全エネルギーを作品に注いできたワグナー・ナンドール氏。日本人として生きた氏が見つめ続けた第二の祖国への思いとは――。長年苦楽を共にした和久奈ちよさんに語っていただいた。

取材 2013年8月13日　ワグナー・ナンドール アートギャラリーにて

アートギャラリー内にあるアトリエ
ほとんど材料費のみでワグナー夫妻の手作りだという

ワグナー・ナンドール アートギャラリー
〒321-4217　栃木県芳賀郡益子町益子4338
TEL.0285-72-9866（定期展以外の期間は予約が必要です）
http://www.wagnernandor.com/indexj.htm

そんなことでは日本人になれないぞ！

――ご主人で、ハンガリーの彫刻家であるワグナー・ナンドールさんの生涯を記した『ドナウの叫び――ワグナー・ナンドール物語』を拝読させていただきました。様々な過酷な運命にみまわれながらも、ぶれずに強くまっすぐ生きてこられたナンドールさんの根底にあったのは、まさに武道の心ではなかったか。本当に立派なご生涯で、たいへん感銘を受けました。

今、日本はその本来の良さが失われつつあるように思いますが、日本に帰化されたナンドールさんは、日本という国の良いところも悪いところも本当によく見えていたのではないかと感じました。

そうですね。今、日本社会を嘆く方がいらして、いろいろな教育法に手をつけようとされていますが、もし主人が生きていましたならば、教育方法というよりも、日本古来の「心の落ち着き」を取り戻し、それを根本にしなければならないと言うだろうと思います。

主人は常々、日本はそうした「心の落ち着き」があったからこそ、それが根本になってこんなに良い国ができたのだと言っておりましたから。

――ナンドールさんは、ご自分の講演録（1975年）でもお話しされていますが、幼い頃可愛がってくださったお祖父様の影響が相当にあるようですね。このお祖父様が、ナンドールさんに、日露戦争で見せた日本の将軍の武士道的振る舞いについて熱く語ってきかせたり、新渡戸稲造の『武士道』を贈ったとお聞きしています。

そうですね。オーストリア・ハンガリー帝国の皇帝の侍従武官長だったお祖父様に、それはもう可愛がられて育ったようです。主人が2歳の頃、お祖父様の大きな手の平に乗せられて、ハンガリー騎兵隊のパイプを吸ったんだって、よく自慢していました（笑）。

このお祖父様だけでなく、お父様にも色々な意味で影響を受けていると思います。お父様はご自身がドイツに留学している時に、日本人の留学生達と出会って、その立派な振る舞いにいたく感銘を受けたそうです。日本では明治時代ですね。ですから主人は怠けているとよく「そんなことではお前は日本人になれないぞ！」とお父様に言われていたそうです（笑）。

主人が読むようになった『老子』も、生活の規範としてお父様が主人12歳の時に与えたものだと聞いています。

主人によると、猫可愛がりに可愛がってくれたお祖父様が亡くなったとたんに、それまで一言も口出ししなかったお父様が主人に対してものすごく厳しくなったのだそうです。日本の殿様の子供は大変厳しく育てられたが、父親はそういう日本のあり方を学んだので、自分に厳しくなったのではないかと言っていました。

スウェーデン時代のワグナー夫妻
収入がまったくない時期、心配する母親を安心させようと、身なりを整えて写真を撮り故郷の母へ送ったという

ワグナー・ナンドール　和久奈南都留
1922年ハンガリー生まれ。幼少の頃、祖父から『武士道』、父からは『老子』を手渡され、東洋の思想に深い影響を受ける。1940年ブダペスト国立美術大学入学、彫刻を専攻。41年に第二次大戦に志願し数々の戦功をたてる。戦後はハンガリーの博物館の設計、改築、新築や、彫刻の制作活動に打ち込む。1956年のハンガリー動乱の際に反政府運動のリーダーの一人として活躍し、以後、ソ連共産党に追われスウェーデンに亡命。スウェーデンで秋山ちよ氏と出会い、1966年再婚。1969年に日本に移り住み、栃木県益子町にアトリエを構えた。1975年日本国へ帰化し、以後数々の多彩な創作活動を行なった。1977年に制作を開始した「哲学の庭」は1994年に完成。1997年に75歳で永眠。

和久奈ちよ
北海道札幌市出身。
日本女子大学卒。

お姉さんに比べてあまりに自分だけに厳しいので、「自分は本当の子供ではないかもしれない」と思ったそうです（笑）。

――講演録によると、ナンドールさんは『老子』をいつも最も感銘を受けた愛読書の一つとして持ち歩いておられたようですね。第二次大戦で志願して軍人となり戦われた時にも、常に『老子』を持っていたとあります。

「戦場で折りに触れこの書を開き、読んでは心安らぐ思いをした」と語っておられますね。

はい。『老子』は時々開いては読んでいましたね。主人の作品、絵などを見て、「これは老子の教えですね」などとおっしゃる方もいます。日本人はあまり『老子』を読みませんが、ハンガリーでは、少なくとも大学を出た人は皆『老子』を読んでいるのです。良い訳のものがはじめからあったからでしょう。日本で訳本が出たのは、ごく最近のことですね。ここの財団の名称も、主人が存命の頃は、「タオ（道）研究所」という名前でした。よく新興宗教と間違われることもあったのですが、ハンガリーでは「タオ」と言ったらすっと受け入れられるんです。

――ナンドールさんの生涯から感じることは、ものすごく強い信念の持ち主であると同時に常に人を思いやり、人のために、という心がおありになるということです。

その根本はおそらく家庭教育にあったと思いますね。主人の母はカトリックで信心深い人でした。父もそれにならって信心深く、ご両親ともとても立派な方だったと思います。ですが、お母様は熱心なあまり、神父や尼であればどんな人でも「いい人」とされるので、主人は子供の頃はずいぶんそのことに対し批判的だったようです。

ただ、家庭で培われた信心深さというものは芯にあったと思います。主人は若い頃「信心」というもの、宗教というものに対し、どちらかというと敬遠していたところがありました。

ところが第二次大戦の際に、その敬遠していた自分自身が「神頼み」をすることになるんですね。その時に「神の存在」というものを強烈に意識したと言います。それ以来、「信ずる心」というものは変わらなかったと思います。

信じるものは人智を超えたエネルギー

――その、神の存在を意識したエピソードについては、ご主人の講演録に詳しいですね。ここでそのお話の要約を紹介させてください。第二次大戦時の、ナンドールさんが22歳の時のお話です。

……ある部隊がロシア軍に包囲され私は状況連絡と武器弾薬を届ける役目をおい、兵隊を連れ谷間の多い山岳地方に向かいました。皆を連れて重い荷